



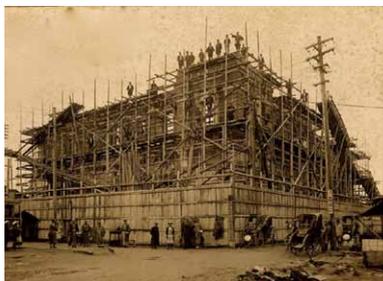
建築とアートをリスペクトする大分の精神。
それが今、銀座で新たな実を結ぶ。

OITA ——— Z ——— GINZA



1996(平成8)年、国の登録有形文化財に指定された大分銀行赤レンガ館(1996年撮影)

昨年、開業100周年を迎えた東京駅。この日本を代表する近代建築を設計した辰野金吾による建物が、大分市内にもある。それが、大分銀行赤レンガ館(旧第二十三国立銀行本店II写真上)だ。輸入赤煉瓦に白い御影石の帯を巡らせ、ドームを配したいわゆる「辰野式」。地元の建設会社が工事を担当し、1913(大正2)年に竣工した。第二次世界大戦末期には空襲で壁のみを残して焼失したものの、1949(昭和24)年、外部はほぼ以前のまま、内部も元の状態に近づける形で復旧された。そこにはこの素晴らしい建物を愛する大分市民



建設途中の二十三銀行本店



戦災復旧工事後の大分合同銀行(当時)本館



上/世田谷美術館で知られる建築家・内井昭蔵設計の大分市美術館。珪藻土などの自然素材を多用し、周囲の自然環境と一体化している。



右/磯崎新の初期の代表作であるアートプラザ(旧大分県立図書館)。コンクリート打ちっばなしと正方形断面の中空梁が非常に力強い造形を生み出している。

の熱意と、建物を作った先人たちへの敬意があったのだ。大分は建築家・磯崎新の故郷。今も多くの磯崎建築が残されている。「アートプラザ」に転用された旧大分県立図書館(1966年築)もその一つ。新図書館の建設によって、建物は解体されることになったが、地元の文化人と多くの人々の声で保存が決定。改装後の1998(平成10)年、アートプラザの柿落とし展となったのは風倉匠、赤瀬川原平ら中心人物が大分にゆかりの深い「ネオ・ダダ JAPAN 1958-1998」だった。アートプラザを巡る、一連の大分アート運動の成功を受けて誕生したが、大分市美術館(1999年築)だ。その陰には、大分を代表する財界人・川崎裕一(佐伯建設前会

長(故人)と菅章(大分市美術館館長)の協働があったことも見逃せないだろう。



風倉、川崎らと並んで中央に赤瀬川原平の顔も見える(1998年、於アートプラザ)



左・磯崎新、左から2人目・風倉匠、右・川崎裕一(1998年、於アートプラザ)

展覧会情報

2015年5月7日(木)～24日(日) / 11:00-18:00

※月曜日、火曜日は休廊

OITA to TOKYO = ネオダダから始まるアート・ムーヴメント =

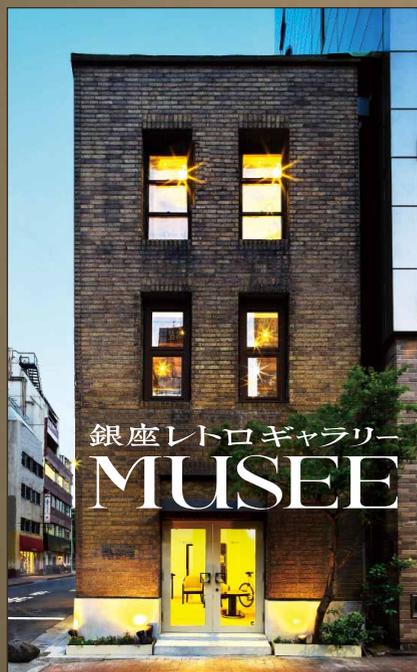


風倉匠

大分出身の吉村益信を中心に、1960年東京で結成された前衛芸術グループ「ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ」。彼ら「ネオダダ」は過激なアクション、廃物など卑俗なオブジェの使用、即興的パフォーマンスなどを通して60年代美術シーンをリードし、その後の日本美術界に大きな影響を与えた。「ネオダダ」メンバーの風倉匠の作品を中心に、当時の活動と現代とを重ね合わせようとする展覧会だ。



画廊内に展示された風倉作品



銀座レトロギャラリー
MUSEE



東京都中央区近代建築100選

それは、80年の歴史を刻む建築と新しい未来を導くアートが共創する特別な空間。



80年建築の空間を、展覧会の会場としてご利用いただけます。

〒104-0061 東京都中央区銀座1丁目20-17 月・火曜日 休廊
Tel 03-6228-6694 kawasaki-brand-design.com ◀最新情報 配信中

大分の赤レンガ館同様、東京銀座の昭和通りにも街の歴史を見守ってきた建物がある。それが、ここで紹介する「銀座レトロギャラリーMUSEE」だ。プロデュースしたのは、先に紹介した川崎裕一の長男・川崎力宏。彼が建築とアートを愛するDNAを受け継いでいるのは、このギャラリーを見ればよくわかる。建物を購入した当初は、解体し、建築家・藤本壮介によるタワービ

ル新築を計画していたが、昭和レトロを醸し出す建築の魅力に取りつかれ保存・再生を決意。自ら改修工事を指揮し、装い新たにギャラリーとして再生させたのだ。80年の歴史を持つ建物は単なる美術作品の展示場ではなく、作り手と鑑賞者にインスピレーションを与え、人々の新たな出会いが生まれる特別な場。ぜひ現地に足を運んでその魅力を感じてほしい。

作り手にも鑑賞者にも
インスピレーションを与える、
80年の歴史を刻む建物が持つ「場の力」。



左/外観はもちろんのこと、建物内部もクラシックな味わいを残しており、趣深い。

下/大分県日田市在住のガラス作家カジワラ・邦によるステンドグラス作品が建物を飾る。



銀座レトロギャラリー
MUSEE

